第17回
神戸大学祭
5.14-18,22

KOBE UNIVESITY FESTIVAL PROGRAM

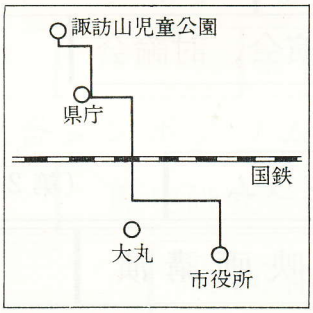
前夜祭

14（土） 13.00～21.00 国際会館

市中パレード 13.00～15.00

ものみな，内容を明示する代表的な表現体を持っています。そういうわけですから，大学祭で僕たちの目指すものを集中的に表現するものを，前夜祭は身に付けているのです。その際，翌日からの大学祭での，あらゆる活動への問題提起をおこない，新たなる創造へのモメントを造り出し，かつまた大学祭に託された課題を明示するのが講演なのです。この課題は《虚像の中の拠点の実像》に示されています。文化は人間のものであり，人間は社会的存在なのですから，今日の社会と関係しているのです。僕たちの文化は僕たちで創るのです。時に今回は多くの音楽系サークル，200名の合同演奏があります。新しき本来を築くために。

＜パレードコース＞



講演 15.00～16.30

「他人」とは— 安部公房

現在，ぼくを引裂こうとしている，その負圧は「他人」という存在の一語につきるかもしれない。「他人の顔」は，この問題に挑戦したものである。ほんの緒戦にすぎないが，「他人」の意味については一応書きつくしたつもりである。ぼくはやっと「他人」の恐怖を垣間見たにすぎない。「他人」よりもむしろ隣人の方が敵なのだという論理にまでは何とか辿りつけたが，気持の上では，ますます恐怖をつのらせている。当分の間「他人」はぼくのテーマであり続けるだろう。下手をすると一生このテーマから抜け出すことが出来ず，結局「他人」に打ち負かされたままで終わってしまうかもしれない。だが他人の勝利はとりも直さず隣人と「他人」の対立関係の勝利なのだ。そしてぼくの敗北はぼく個人の敗北だけでなく，人間存在の限界を認めたことになる。それは許されない。他人への通路の探検はやはり絶対に放棄を許されない。ぼくの存在自体にかかわるテーマであるらしい。 ——「われらの文学」——より

経歴
作家
著書「壁」「闖入者」
「飢我同盟」
「他人の顔」その他

音楽会 19.20～21.00

みんなで歌おう 19.20～19.40

演出　応援団
出演　エルデ，学内合唱諸団体，前夜祭参加の全員

講演，演劇の後は，音楽祭のトップを切って，みんなが出演者になる，お待ちかねの〝皆で歌おう〟の時間です。誰でも知っている歌，憶えてみたいと思っていた歌，大声で歌って見たかった歌，今夜は好きな歌を元気に歌いましょう。

前　夜　祭

マンドリン　19.40～20.10

指揮　芦田忠征　山本隆久

一　「旅愁の主題による変奏曲」　服部　正　作曲

原曲は外国のものですが，幼い頃から親しみ，口ずさんでいたメロディを服部正氏が若かりし時，変奏曲として作曲されたもので，マンドリンの特質をよく生かした見事な曲です。マンドリンのいろいろな奏法を駆使した variation の巧みさをお聴き下さい。

二　「城ケ島の雨」　梁田　貞　作曲　義田耕三　編曲

原曲は北原白秋の美しい詩に梁田貞が日本民謡的な気分をとり入れて作曲した抒情的な小品でこれを特に我クラブのために，元指揮者本沢俊紀氏の父君義田耕三氏が編曲されたものです。

力強いIntroductionに続いて，ウィーン風ワルツ，さらに典型的なワルツ，そして打楽器と低音楽器によつてビギンのリズムに導びかれ，続いてルンバへと多彩な展開をみて曲を終ります。

同じ主題のもとでのリズムの変化を存分に楽しんで頂きたいと思います。

三　序曲「ロ短調」　コンラッド・ヴェルキ　作曲

ヴェルキは近代ドイツの代表的プレクトラム作曲家の一人で，マンドリン音楽に多くの貢献を残し，1920年頃に最も活躍した人である。彼の作品は我国ではよく演奏され，特に4つの序曲は有名であるが，その中の1つ「序曲ロ短調」は最も迫力のある曲として名曲の一つに数えられている。曲はアレグロによるフォルテシモで力強く始まり，低音楽器の勇壮なリズムに乗って主題が華やかに展開されてゆく。次にアダージオにはいるとギターの奏するアルペジオの上に，ゆるやかで牧歌的な施律が歌われ，そしてこの主題は全パートの強烈な三連音符により次第に高められてゆく。次に再び初めの主題があらわれ，マエストーソを以て豪快にフィナーレを飾る。

合同演奏　20.20～21.00

オーケストラ・グリー・アポロン・女声合唱・教育学部音楽科

演劇　16.30～18.30

「ラインの監視」—3幕—　演劇研究会

＜スタッフ＞

演出	広野幸夫
同助手	水谷佐知子
舞台監督	今吉熙
装置・道具	松本章
	近藤和子
	浜崎初子
照明	折戸章夫
衣裳	渡壁澄江
効果	浜崎初子
制作	宮下徳夫
	芳野健太郎
	玉田美也子

＜キャスト＞

アニズ	浜崎初子
ジョセフ	折戸章夫
ファニー・ファレリー	瀬尾陽子
デーヴィド・ファレリー	足立靖彦
マース・ド・ブランコヴィス	玉田美也子
デック・ド・ブランコヴィス	青山繁弘
サラ・ミュラー	西村三重子
ジョシュア・ミュラー	宮下徳夫
ボド・ミュラー	小柳絹代
ババット・ミュラー	阿江信子
クルト・ミュラー	小浜進

1940年の晩春。第二次世界大戦もまだ世界戦争になっていない時代である。

ドイツ地下運動の闘士クルト・ミュラーは彼の家族を伴なって妻サラの故郷アメリカへやって来た。わずかな休暇をとることと，地下運動への基金を集めるためであった。しかし，その彼の前に，ルーマニアの伯爵であるテックが現われ，ドイツ大使館へ「彼を売る」のと引きかえにワルトの持っている基金を要求する……

この戯曲は，歴史上あまり知られていないドイツ人の反ナチス抵抗運動とアメリカ参戦の問題をとりあつかった作品です。

ファシズムに対する抵抗運動に関してはフランスなどで特に有名ですが，ドイツ人のなかにクルトのように強い平和への信念と来たるべき新らしい社会を心に抱きつつ，反戦・反ナチス運動の最前線に立った人がいたことは我々に信念と行動のあり方について深い問題を提示しています。信念と行動のあり方，いいかえれば，思想と行動の止揚にこそ，我々自身の主体性の問題もあるのですから。